

集団における自己犠牲行動に対して犠牲コストの個人間格差が与える影響 —功利主義的社会規範による集合的責任の分配—

清水 計法

本論文の目的は、集団における自己犠牲行動や向社会的行動に関わる要因とその根拠について探ることであった。集団において1人の自己犠牲行動や向社会的行動が必要な場合に誰がそれを行うのかという問題にアプローチした実験的研究として Volunteer's Dilemma や Missing Hero Dilemma の研究がある (e.g., Diekmann, 1985, 1986, 1993; Diekmann & Przepiorka, 2015)。Volunteer's Dilemma は、1人がコストを払い協力することで、集団全体が利益を得る社会的ジレンマであり、Missing Hero Dilemma は1人が協力することで協力者以外の人利益を得るという社会的ジレンマである。この種の社会的ジレンマは、困っている人に誰が手を差し伸べるか、逸脱した個人に誰が制裁を与えるかなど、責任が分散される状況をうまく表している。これらのジレンマゲームでは、プレイヤーの人数が増えるほど1人あたりの協力率は低下すること、協力にかかるコストが個人間で異なる場合、コストが低いプレイヤーはコストが高いプレイヤーよりも協力率が高いことなどが示されている。しかし、自己利益最大化の観点から協力行動を予測・説明するなど、基本的に協力行動を利己的なものとして捉えていることが多い。本論文では、従来の Volunteer's Dilemma 研究や Missing Hero Dilemma 研究には倫理的・社会規範的観点が欠けていることを指摘し、功利主義的社会規範という概念を用いて、Volunteer's Dilemma や Missing Hero Dilemma における協力行動を考察した。本論文で行った考察は以下であった。

誰か1人がコストを払い協力行動をとらなければならない場合、功利主義に従えば、コストが低い人ほど協力する責任は大きい(図1)。これは、そうすることで当事者全体としての合理性をより高めることができるからである。なお、協力する人は1人でよいため、ある人の責任が大きいならば、その分だけ他の人の責任は小さくなると思われる。したがって、協力コストが高い人は低い人に比べて協力する責任が小さくなる(図1)。これは、当事者全体が負う責任が功利主義によって各当事者に分配されることを意味している。一方、協力コストに格差がほとんどない場合には、責任は平等に分配される(図2)。なぜならば、誰が協力しても全体としての合理性は一定だからである。したがって、協力コストに格差がある状況では、協力するよう動機づけられるほど大きな責任を負う人が存在し、その人による協力行動が生じやすいと考えられる。そして、協力コストに格差がない状況では、誰もが同じくらいの小さな責任しか負っていないため(効率よく責任が分散・分配されてしまっているため)、協力行動は生じにくいと考えられる。なお、一般に社会行動に対する責任を規定するのは社会規範であるため、当事者全体の合理性を高めよと我々に指示する功利主義的社会規範を仮定する。以上のように、功利主義的社会規範による集合的責任の分配という観点から、Volunteer's Dilemma や Missing Hero Dilemma の協力行動を説明することができる。

以上のことを確かめるために「① 実験者によって与えられた自分の報酬を放棄するかどうか選択する(放棄した場合は与えられた報酬が失われる) ② 3人のなかで少なくとも1人が自分の報酬を放棄した場合、放棄しなかった人は与えられた報酬をそのまま獲得する ③ 誰も放棄しなかった場合は、全員の報酬が1円になる ④ 2人が放棄した場合は2人とも報酬が失われ、3人全員が放棄した場合は3人とも報酬が失われる」というゲームを行った。このゲームは、従来の Missing Hero Dilemma ゲームにおける協力行動に自己犠牲的意味合いをより強く持たせたゲームであった。

研究1では、実験者から与えられる報酬が参加者によって異なり、自分の報酬が最も少ない条件(アシンメトリー条件: 自分520円、他730円、860円)と、報酬がどの参加者も同じである条件(シンメトリー

条件: 全員 500 円) で一回きりのゲームを行った。また、2 つの条件を、ゲーム内での自分の選択がゲーム後に露見する露見状況と、露見しない匿名状況で行い、外在の社会規範と内在の社会規範 (道德規範) の 2 つの側面からアプローチを試みた。比較した従属変数は報酬の放棄率であり、アシンメトリー条件の放棄率はシメトリー条件の放棄率よりも高いと予想された。実験の結果、アシンメトリー条件では報酬の放棄に対する社会的・道徳的責任感が高く、放棄率も概ね高いという結果が得られた。アシンメトリー条件でもシメトリー条件でも、放棄することで失う報酬は同じ 500 円程度であるにもかかわらず、アシンメトリー条件で社会的・道徳的責任感が高く報告され、協力率が高いという結果は、功利主義的社会規範によって放棄する責任が各当事者に分配されたことを意味しており、自己犠牲行動や向社会的行動に影響を与える規範としての功利主義的社会規範を示唆するものであった。

研究 2 では露見状況で Missing Hero Dilemma ゲームを 30 回繰り返し、功利主義的社会規範の効果を繰り返しのゲームのなかで検討した。実験では、与えられる報酬が参加者によって異なる条件 (アシンメトリー条件) と、報酬がどの参加者も同じである条件 (シメトリー条件) が設定されていた。アシンメトリー条件の参加者 3 人には 1 回ごとに 30 円、50 円、70 円がそれぞれ与えられ、それを用いてゲームを 30 回繰り返した。なお、与えられる金額は固定であり、例えば 30 円が与えられる参加者には 30 回すべてで 30 円が与えられた。シメトリー条件の参加者 3 人には 1 回ごとに 30 円が与えられ、それを用いてゲームを 30 回繰り返した。比較した従属変数は 30 回のうち報酬を放棄した回数であり、金額の効果 (アシンメトリー条件での 30 円と 50 円と 70 円の比較) と条件の効果 (アシンメトリー条件の 30 円とシメトリー条件の比較) が検討された。研究 1 で示唆された功利主義的社会規範の効果を考慮すれば、アシンメトリー条件では与えられる報酬が低い参加者ほど放棄に対して大きな責任を負っていると考えられ、放棄回数が多いと予想された。また、アシンメトリー条件の 30 円の参加者はシメトリー条件の参加者よりも放棄回数が多いと予想された。実験の結果、放棄回数に差は認められず、金額の効果も条件の効果も見られなかった。この結果に対して、繰り返しの Missing Hero Dilemma ゲームでは、功利主義的社会規範の効果よりも、最終的な報酬の格差をある程度受け入れつつ、皆が等しい回数だけ放棄するという規範・選好が協力行動に影響を与えたという考察を行った。また、アシンメトリー条件で設定した金額の格差が小さかったため、功利主義的社会規範がそもそも顕現化されなかったという考察を行った。

最後に、功利主義的社会規範が自己犠牲行動や向社会的行動に与える影響について調べるためには、放棄する報酬により大きな格差をつけたり、集団サイズを大きくしたりするなど、さらなる検討が必要であることを述べた。(社会心理学)

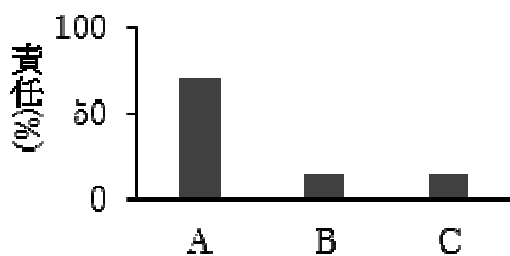


図1 Aの協力コストが最も低い場合の責任配分

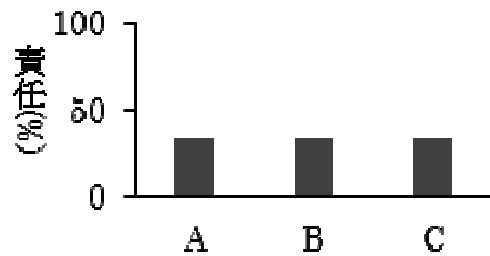


図2 協力コストが同じ場合の責任配分